

2019年度 修士論文

中国におけるスキー経験者の参加動機に関する研究
-北京のスキー経験者に着目して-

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科

スポーツ科学専攻 ビジネスマネジメント研究領域

5018A045-1

戴 文倩

研究指導教員： 原田 宗彦 教授

目次

第1章：序論.....	3
第1節 諸言.....	3
第1項 中国におけるスキーとスキーツーリズムの発展現状.....	3
第2項 中国におけるスキー経験者の特性.....	6
第3項 北京におけるスキーとスキーツーリズムの発展現状.....	6
第4項 中国におけるスキー産業が抱える問題.....	7
第2章：先行研究の検討.....	10
第1節 動機に関する研究の検討.....	10
第1項 自己決定理論.....	10
第2項 内発的動機づけと外発的動機づけの関係.....	12
第2節 スポーツ参加動機とスキルレベルに関する先行研究.....	13
第3節 スキー参加動機に関する先行研究.....	15
先行研究のまとめ.....	16
第3章：研究の目的と方法.....	17
第1節：研究目的.....	17
第2節：調査概要.....	17
第1項：調査方法.....	17
第2項：調査項目.....	21
第4章 結果と考察.....	22
第1節 スキー経験者に関する特性.....	22

第1項 人口統計的特性.....	22
第2項 スキーレベル.....	22
第3項 スキー経験と特性.....	23
第2節 スキー参加者の参加動機尺度の分析結果.....	25
第2節 一元配置分散分析によるスキーレベルの比較.....	27
第3節 スキーレベルと参加動機各因子の比較.....	28
第1項 多重比較によるスキーレベル別の結果と考察.....	28
結論.....	32
第1節 まとめ.....	32
第2節 提言.....	34
第3節 本研究の限界と課題.....	35
引用・参考文献一覧.....	37
付録：調査で用いた質問紙.....	42

第 1 章：序論

第 1 節 諸言

第 1 項 中国におけるスキーとスキーツーリズムの発展現状

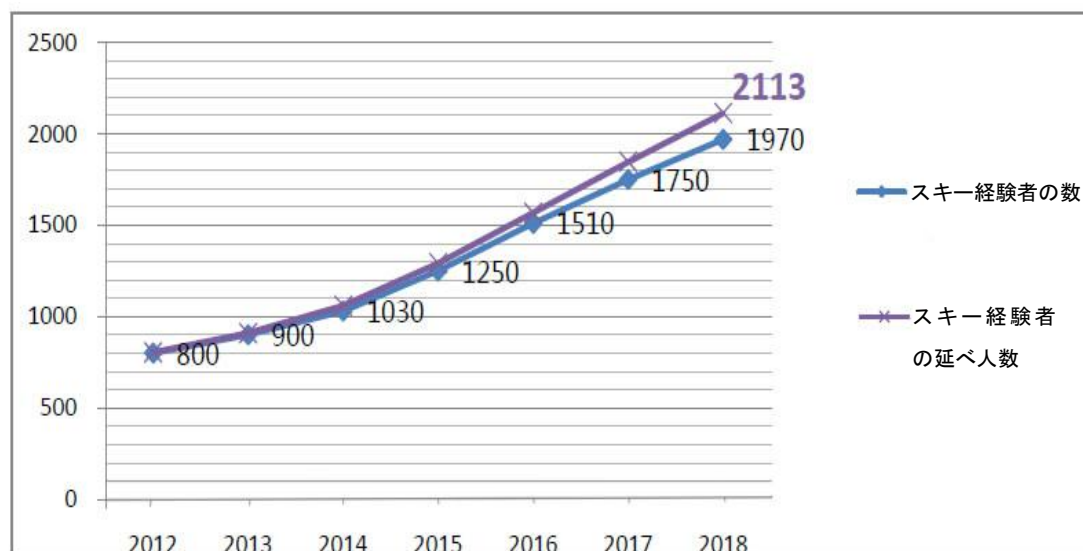
スキーは、特定の自然環境を利用して成立するレクリエーションである（呉羽,2017）
中国におけるスキー産業は、歴史が浅く、ヨーロッパ、アメリカ、そして、日本や韓国より発展が遅れていると考えられている。

中国の 2018 年冬季オリンピックのメダル獲得数は、世界 16 位と、2016 年の夏季オリンピックのメダル獲得数（世界第 3 位）に比べると決して多いとは言えない状況にある。

2022 年には北京で冬季オリンピックが自国開催されるということも踏まえ、中国国家体育总局は 2016 年に冬季スポーツ発展計画を発表し、2017 年には中国国家旅遊局が冰雪旅行（ウインタースポーツツーリズム）推進の方針を発表した。そこで、スキーはウインタースポーツの一部として国家の関心事とされ、2016 年 10 月にはスキー産業の発展を目的とした「健康的な中国 2030 年計画」、「施設建設計画」（2016-2022）などの国策も公開された。そして 2025 年の三大目標として、下記のような内容が掲げられた。これから 1. ウインタースポーツ関連産業総規模：1 兆元（日本円約 16 兆円）、2. 競技としてのウインタースポーツ参加者数：5000 万人、3. レジャーとしてのウインタースポーツ参加者数：3 億人である。これらの政策が改良された背景になり、スキーに対する需要の高まりとスキー市場の発展も期待が高まっている。

2000 年までスキー産業の発展は比較的緩やかであったが、スキーを経験した人の数は年間平均 195%という増加率であった。しかしながらスキー参加人数が増えていくとともに、1996 年～2001 年までスキーを経験した人の数は 98 倍に増加していた一方、スキーに定期的に参加する人の数は僅か 1%に満たず、スキー参加者に関しては、約 7 割が雪遊びを中心とした初心者であった。2011 年からはすでに急速なスキー産業発展の時期に入り、中国スキー産業白書（2018）が発表したスキー人数推移状況では図 1-1 にあるように、2012 年以来、毎年 100 万人以上の参加人口が増加し、2018 年までにスキー経験者の延べ人数は 2113 万人に達した。

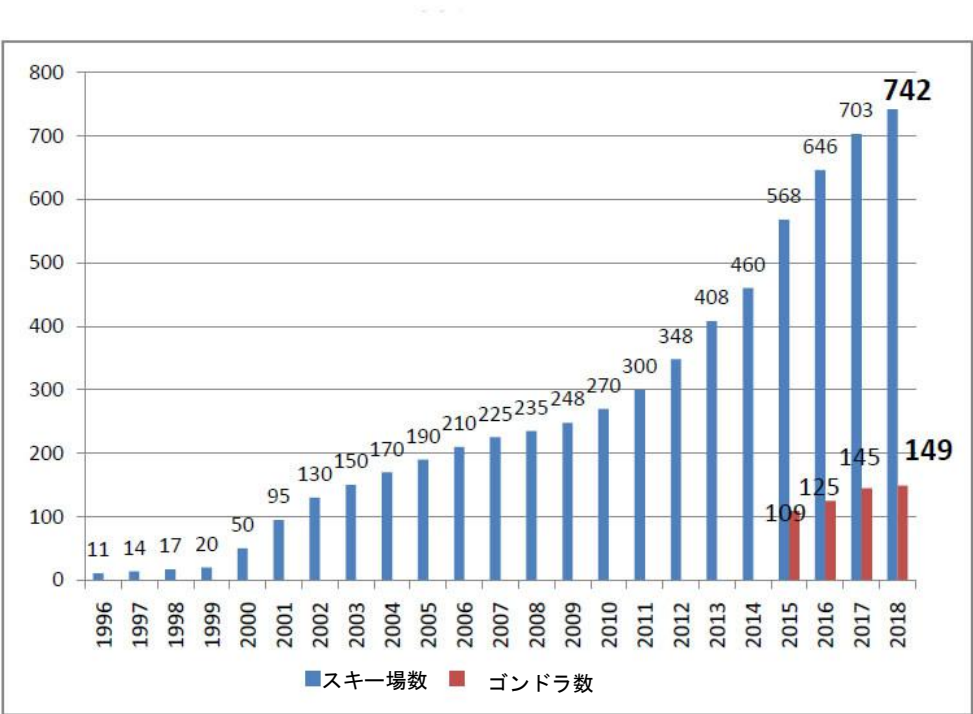
図 1-1 中国におけるスキー経験者の数（延べ人数）統計



1996 年にハルビン市のアブリスキー場にてアジア冬季スポーツ大会開催して以来、中国の東北、華北と西北などの地域に続々とスキー場が建てられた。図 1-2 に示した通り、2001 年の時点で、150 個のスキー場が建設され、以降、スキー場数は継続的に増加し

た。特に 2011 年から急激な増加が始まり、2018 年までの 7 年間で約 2.5 倍に増加している。そして、ゴンドラ数もスキー場数の増加とともに 2015 年以降、毎年増加している。特に総合型の大規模スキーリゾートはゴンドラなどを完備した施設と相まって、スキー場が提供するサービスの質も年々向上している。

図 1-2 中国におけるのスキー場数とゴンドラ数統計



第2項 中国におけるスキー参加者の特性

スキー産業の発展状況については、中国スキー産業白書が「スキー場の分類」、「数量」、「ユーザー」、「滞在時間」、「スキー場の特徴」、「訪問者数」を挙げている。表 1-1 が示したように、旅行体験型スキー場は施設が簡単で、初級コースしか整備されていない。このタイプのスキー場が最も多く、ユーザーは5万人以下で、滞在時間も短い訪問者が主な旅行者となった。地元型のスキー場を利用しているユーザーは地元住民であり、滞在時間は旅行者より長くなっていたが、泊まりなしの3～4時間を利用した日帰りのスキー経験者であった。地元型スキー場には各レベルのコースは整備されているが、落差は小さくて利用した訪問者数は5～15万人となった。一泊以上長い滞在時間を利用したユーザーは、リゾート型スキー場に訪れたリゾートスキー客であり、このタイプの施設を利用した訪問者数が最も多く、15万人以上となった。規模が大きく、サービスも充実しているのがリゾート型スキー場の特徴である。

表 1-1 中国におけるスキー参加者とスキー場基本状況

スキー場分類	数量比率	ユーザー	滞在時間	スキー場特徴	訪問者数
旅行体験型	75%	旅行者	2時間	施設簡単 初級コースしかない	5万以下
地元型	22%	地元住民	3～4時間	落差小さい 初級、中級、高級コースがある	5万～15万
リゾート型	3%	リゾートスキー客	一泊以上	規模が大きい 充実なサービス	15万以上

出典：中国スキー産業白書(2018)

第3項 北京におけるスキーとスキーツーリズムの発展現状

北京のスキーシーズンは11月下旬から翌年の3月まで、統計によると、2002年の北京には、営業免許のスキーリゾートが6つしかなかった。しかし、その数は2003年に9箇所、2005年に13箇所に増加した。スキー経験者の数から判断すると、2002年には80万人以上が北京のスキー場でスキーに参加したことになる。そして、2003年にスキーに参加している人の数は100万人を超え、2005年には、100万人以上、2009年には150万人を超えた。さらに、2012年から2013年のスキーシーズンには、250万人以上が北京のスキー場でスキーを経験した。

北京スキー場の収益に関しては、2002年の北京のスキーリゾートの収益は1億元（1元＝約16円）に達した。2003年、収益は1億8,000万元に達し、2005年は3億5,000万元、2012年には北京のスキーリゾートの収益は9億8,000万元に達した。（Luo, 2005）

北京、吉林省、河北省の周辺地は、近年スキーツーリズムが最も発展している地域である。スキー経験者に関して北京からの経験者は中国全体のスキー経験者の30%以上を占めており（スキー産業白書、2018）、北京でのスキーの発展は中国全体のスキー産業においても重要な市場であることがうかがえる。

第4項 中国におけるスキー産業が抱える問題

スキー産業白書（2018）によれば、スキー場の数が増えている一方で、大型のスキー場はまだ少なく、中小規模のスキー場が多いことが指摘されている。現在、中国においてスキー関連産業の普及と拡大はまだ未成熟である。中国ではスキー市場の現状

と対策、市場構造分析、またはスキー市場発展の問題に関する研究が始まったばかりである。

スキー場の数について：国内スキー場は供給過剰であり、各地のスキー場は市場シェアを奪うため、価格競争による悪影響が出ている。北京などスキー産業が発展した地域では、これらの影響が大きいことから、対抗策として、政策は対応方針を公開したが、ほとんど効果がなく、問題の解決にも役立たないという。

スキー場の規模について：現在国内では、ケーブルカー、人工造雪機や中高級ゲレンデなどを配置した大型スキー場が少ない。一方、粗末な設備を配置した中小型スキー場が多いのが現状である。その中小スキー場のサービス水準が低いため、良いイメージを顧客に与えることができず、一般大衆のスキーに参加する意欲も減少したと考えられる。

スキー場の管理について、地域による管理水準の不均衡は、現在国内の課題である。中大型スキー場は高レベルの管理を行っている。そして、民間運営のスキー場は、国有のスキー場より運営実績が上回ると考えられている。その一方、中小型の管理水準は比較的低く、経営知識や管理能力を有するが、レベルの高い従業員も少ない。

北京周辺のスキー場はほとんど中大型であり、ほかの地域により管理水準が比較的高い。場内の管理やスタッフのトレーニングなどを十分重視しているため、優秀な人材や高水準の管理システムを備えている。したがって、顧客に良いサービスを与えることができると考えられる。

スキー市場の発展について主な問題は、管理システムが煩雑となり、環境保護意識及び安全確保に関するマネジメントが弱く、スキーは危険なアウトドアスポーツであり、完全な保護対策には非常に厳しい要件となる。参加者はスキー場で事故に遭う可能性を

最小限に抑えるために専門家の指導も必要である。例えば 2002 年、北京のスキー場にて、事故の確率は 0.2%であり、この数字が表す危険は無視できない。事故によっては、1 回で 20 万元以上の補償を行う事例があった。これは、スキー場の投資と管理にとって大きな損失である。スキーツーリズムにおけるエコシステムがまだ形成されておらず、サービスを改善するべくことが指摘された。

スキーを実施する人を引き寄せるために、サービスと満足度の向上、リピーターを増やすことは研究者たちが関心を持っている焦点となる。すなわち、スキーに関する研究と調査はスキー産業の発展と現状把握に限られており、市場全体の把握と産業の持続可能な開発または消費者、つまりスキー経験者たちの参加心理と参加動機など状況について研究と考察は欠如している点が先行研究によって指摘されている (Kan, 2012)。動機 (motivation) は、人々を行動に導く各々の内的な力を表し、人の活動を促進する心理的または内部的な動機である (Schiffman, 2004)。その定義は：人間の行動を促し、目標を達成するために個人の思考、希望、または理想などものを満足する持続的な力と指摘された (Iso-Ahola, 1999)。近年、スポーツ心理学界においては、常に動機づけに着目する研究は多くされている。本研究はスキー経験者の参加動機に着目し、動機に影響を与える要因を明らかにした上で中国におけるスキー産業の発展に寄与する。

第2章：先行研究の検討

第1節 動機に関する研究の検討

第1項 自己決定理論

広義な動機は自己決定理論（self-determination theory, SDT）となり、20 世紀 80 年代に提案され、米国の心理学者である Deci と Ryan 等によって作成されたものである。自己決定理論では、自己決定性の概念を核として、さまざまな領域における動機づけを包括的にとらえる理論的枠組みを構築している（以下 SDT と省略する）。SDT は従来の方法を用い、個性を発展させる人間進化した内部のリソース行動の自己規制という生物のメタ理論人格を強調するために、人間の動機と個性を向上させるアプローチである（Ryan, &Deci, 2000）。多くの人間行為は自由意志と自己決定で決めることが、この学説が着目するところであり、人格の発達、自主規制、普遍的な心理的ニーズと生活などの基本問題に対処できる。SDT で最も重要なのは自律動機とコントロール動機である。自律動機には内発的な動機要因と外発的な動機要因この 2 つを含めており、つまり、人々は活動の価値を認めたという動機を自己意識と理想的に統合する。自己決定理論では、非動機づけ（amotivation）、外発的動機づけ（extrinsic motivation）、内発的動機づけ（intrinsic motivation）という 3 つの動機づけ状態を想定している。非動機づけは、行動と結果との随伴性を認知ではなく、活動にまったく動機づけられていない状態である。外発的動機づけは、自己決定性の程度から複数のタイプに区分される。自己決定理論の下位理論の 1 つである有機的統合理論（organismic integration theory: Deci & Ryan, 1985）では、内在化のプロセスを仮定することで外発的動機づけを精緻化し、内発的動機づけとの間に連続

性をもたせている。内在化とは、自己の外部にある価値や調整を取り込み、自己と統合することである。

外発的動機づけは4つに分けている: 1. 外的調整 (external regulation) ; 2. 取り入れ的調整 (introjected regulation) ; 3. 同一化的調整 (identified regulation) ; 4. 統合的調整 (integrated regulation) (Ryan&Deci,2000)。1つ目の外的調整 (external regulation) は、物的報酬の獲得や罰の回避を目的とする動機づけであり、外発的動機づけ統制によって行動が調整される。2つ目の取り入れ的調整 (introjected regulation) では、部分的に内在化が生じ、明らかな外的統制がなくても行動が開始される。しかし、行動の目的は不安や恥の感情を減少し、自己価値を守ることであり、内面での被統制感から動機づけられる。3つ目の同一化的調整 (identified regulation) は、行動の価値を自己と同一化し、個人的な重要性から自律的に行動する動機づけである。4つ目の統合的調整 (integrated regulation) は、ある活動に対して同一化が他の活動に対する価値や欲求と矛盾なく統合され、自己内で葛藤を生じずに活動に取り組む動機づけである。

内発的動機づけは3つに分けられている:

知る (intrinsic motivation to know) ; 達成 (intrinsic motivation accomplishment) ; 体験 (intrinsic motivation to experience) (Vallerand,1992)。活動それ自体を目的として、興味や楽しさなどの感情から自発的に行動する動機づけであること (岡田,2010) が指摘された。内発的動機づけという用語が一つの心理学的な概念として確立するのは1960年代以降であるが、内発的動機づけ概念の学史上の直接的な起源は、1930年代から40年代にかけて動機づけ研究の主流であった Hull の動因低減説や Freud の精神分析的本能理論に対する一連の反論であった (Deci&Ryan,1980) と考えられる。動因低減説と精神分析的本能理論は、

「行動は、飢えや性のような非常に限定的な一次的動因による内的な緊張や刺激によってのみ引き起こされる」と仮定した点において共通しており、この仮定に対して反証する研究の蓄積の結果、内発的動機づけという研究領域が特定されるようになってきたと言える。広い意味での人格心理学の研究が、本能に支配されずに環境に積極的に対処していく人間観を新たに提唱するという2つの動向が1つになり、内発的動機づけの概念が成立したのである。Hunt（1965）は、心理的不適合の最適水準という概念を内発的動機づけ理論の中核に据え、人が最適水準の不適合を維持すべく動機づけられるとした。すなわち、個体は最適量の心理的不適合を欲しており、刺激入力と順応水準の間にズレ（discrepancy）を経験した際、内発的に動機づけられた行動が誘発され、このズレはそれ自体で行動にエネルギーを与え、ズレが消去した際に行動は終結するとした。

第2項 内発的動機づけと外発的動機づけの関係

内発的動機づけと外発的動機づけは多くの学者に指摘される。Ryan & Deci（2000）によると、内発的動機づけは、あることをするとき参加者に対して楽しさをもたらす。すなわち外部からのプレッシャーや報酬など外的なものではなく、娯楽とチャレンジを目的として人を動かす要因となっている。

一方、外発的動機づけは内発的と対極のことを表し、参加者に分離的な結果をもたらすことが可能である。外発的動機づけと内発的動機づけ、この両者を弁別するために最も使われてきた視点は2つがある。1つ目は、内発的に動機づけにあたる行動というのは「行動そのものが目的化している」のに対して、外発的動機づけにあたる行動という

のは「行動そのものは手段である」という具合に目的か手段かで分類する方法である。

2つ目は、行動が誰によって開始されたものかという視点から弁別するものである。すなわち、自分自身の意思により開始されるような行動の背後には内発的動機づけがあると考え、自分以外の要因によって行動が開始される場合には外発的動機づけがあると考えられるのである。Nicholls（1983）によれば、能力の知覚が低い場合、自分自身の感情が関係する状態は動機づけを低下させるという。すなわち、自我関与的雰囲気は、有能さへの欲求に影響を及ぼす要因というよりは、有能さへの欲求が充足されていない場合に、内発的動機づけを低下させる要因になるのではないかと推察される。

外発的動機づけが内発的動機づけに影響を及ぼす2つの側面を仮定した。1つは、外的要因が自己決定感を低下させるによって内発的動機づけが低下するという制御的側面であり、もう1つは、外的要因が当人の有能さに対する知覚を高めるならば内発的動機づけは増加し、逆に低下させるならば内発的動機づけは低下するという情動的側面である。特に、近年の認知的評価理論（Deci&Ryan,1985）では、圧迫感（pressure）や緊張（tension）を与えるような外的要因が抑制効果を持つ制御的事象であるとしている。この理論によって、外的要因が当人の有能さに関する情報を提供するような状況が促進効果を持つこと及び社会的制約が抑制効果を持つことが解釈できる。

第2節 スポーツ参加動機とスキルレベルに関する先行研究

Kenyon（1968）は、人々がスポーツに参加する動機は多面的であり、自分の能力を証明するだけでなく、スポーツに参加する多くの理由があると考えている。Butt（2011）は、

スポーツへの参加に対する人々の動機づけは、生物学的な動機付けとスポーツ体験の向上にあると考えている。Buonamano（1995）の研究によると、若者を研究対象としてスポーツ活動への参加の動機づけは、スポーツに携わる若者は参加動機と年齢、性別、スポーツ種目、両親の教育レベル、および彼らが住んでいる地理的環境と密接な関係を持っている。Hassandm（2003）は、254 人の中学生から 16 人の生徒を選び、スポーツへの参加内的動機づけに影響する要因についてインタビュー調査を実施した。その分析結果は、スポーツへの参加に影響を与える主に個人差と社会環境、2 種類の内的動機づけ要因があるとしている。個人差には主に 4 つの側面が含まれる：能力、自律性、身体的外観、および目標指向；社会環境要因には多様な要因が含まれる：クラスメート、体育教師、学校のスポーツ施設、課外活動への参加、家族支援と身体活動、文化的価値と社会的認識とメディアなど。

Hein（2004）は、Sports Motivation Scale（SMS）を用いて、卒業後のスポーツへの参加意欲を測定した。参加者は 14～18 歳の学生で、合計 400 人の学生がテストに参加するように招待された。調査結果によると、内的動機づけについて、スポーツ活動の参加を通して得るインパクトは卒業した学生たちに対する最も強い影響要因となった。陳（2010）は、大学生の身体運動への参加の内的と外的動機づけを調査した。調査の結果は、大学生のスポーツ参加動機は 7 つの要因のうち、5 つの内発的動機づけ要因は：楽しさ、能力、外見、健康と社交性。残りの 2 つは外発的動機づけ要因として制度と服従が含まれることがわかった。技能レベルの違いが楽しさ、能力、外見と健康、この 5 つの因子に影響を与えるが、社交性にはあまり影響を与えない。動機づけの高い人は低い人より頻繁に長時間に渡って集中して運動を行うので、運動からより大きな身体的・精神

的恩恵を享受できると指摘している。さらに、体育・スポーツにおける動機づけは、スポーツ参加、スポーツの継続と習慣化、スポーツからのドロップアウト、スポーツへの参加意欲、スポーツ技能の学習、試合場面での実力発揮などと強い関係がみられることがわかった。

Casper (2008) は、テニス参加者を対象として研究を行った。その研究は、参加頻度やスキルレベルを相関係数に制定し、調査結果により市場細分化のコミットメント係数を比較した。この研究は、参加者のスキルレベルによって3つの群に分けられ、それは初心者、中級者や上級者となる。結果によると、初心者より、上級者はスポーツ参加を通して得られる楽しさは比較的に低く、参加機会と社会的な制約感が明らかに増加していた。Casper (2007) は、コミュニティテニス協会の537名会員を対象とし、スポーツコミットメント、参加頻度や購買意欲を研究した。その中の運動スキルに関する結果をみると、参加頻度と参加意欲はスキルレベルに影響を与えることが分かった。Watkins (1986) は、スキルレベルと自主参加動機（参加動機の1つ）は正の相関を示している。一方、過去の参加経験と自主参加動機は示していない。

第3節 スキー参加動機に関する先行研究

Alexandris ら (2009) はギリシャにおけるスキー参加者の動機を、エスケープ、社会的アイデンティティ、自然に親しみ、冒険からえた刺激感、社会化、スキルの発達と達成、この7つの要因にまとめた。Finn (2011) はカナダのスキー参加者の参加動機を刺激、社会化、コストパフォーマンス、観光施設、安全性、文化、環境保護、8つの要因にまとめた。Alexandris と Charilaos (2007) の研究によると、スキー参加動機が再訪意図に著し

くプラスの影響を与えることを示唆していた。Hungenberg（2013）らはチャレンジ動機がスキー参加者の参加頻度、スキーレベルと消費能力を予測する重要な要因であることを検証した。内発的な動機は主な要因と検証され、内発と外発両方とも参加動機に大きな影響を与えることがわかった。スキーに参加した消費者を対象について研究は内発的と外発的動機は消費回数と消費関連（involvement）にプラスの影響を及ぼすことが検証された。（Ma,2017）

先行研究のまとめ

以上のように、動機づけ理論には、最も重要な自己決定理論が含まれている。この理論は3つの動機づけを提示しており、それは動機づけなし、内発的動機づけ、外発的動機づけなど3種類である。その中の、内発的動機づけと外発的動機づけは相互に異なるため、両方とも参加動機に影響を与える。そして、スポーツの参加状況に関わる動機は、この2つの動機両方とも関係あると考えられる。また、スキルレベルは参加状況に影響する重要な要因の1つである。

これまで多くの研究者がスポーツ動機及びスキー動機に関する研究を行ってきたが、特にヨーロッパ諸国がスキーに関する研究が多く散見される。一方、国内で行われているスキー参加者に着目した研究は少ない。今後中国におけるスキー産業の発展を貢献するには、スキー参加者に着目した動機を明らかにすることも重要であると考えられる。参加動機に影響を及ぼす要因を検討することで、中国におけるスキー市場の向上において有益となりうると考えられる。

第3章：研究の目的と方法

第1節：研究目的

本研究は、北京市の住民を対象として以下の三つの目的を設定した。

1. 北京のスキー参加者のデモグラフィックを明らかにすること。
2. 北京のスキー参加者のスキーレベルまたは経験と特性を明らかにすること。
3. 北京のスキー参加者のスキーレベル別による参加動機の違いを明らかにすること。

第2節：調査概要

第1項：調査方法

本研究では、データ収集にあたり、オンラインアンケート調査を実施した。オンラインアンケート調査に関しては、設計が紙のアンケート調査と似ているものの、オンライン調査を実施する前に、調査対象者が適切にサンプリングされているかどうかを確認しなければならない。つまり調査を受ける対象が、たくさん集まってくるインターネットの使用頻度と使用頻度が高いプラットフォームを調べる必要がある。

アンケート配布のプラットフォームとして、「ウィチャット（Wechat）」という中国で広まっている無料でトーク（チャット）・音声通話・ビデオ通話を楽しめるリアルタイムのコミュニケーションアプリを利用した。その理由として、ウィチャットはあり、すでにあらゆるインフォメーションを集めるプラットフォームで、ユーザーに総合的なサービスを提供していることが挙げられる。2018年までのデータでは、ユーザー数が7.8

億人に達し、ユーザーの利用率は 95.5%に上り、携帯アプリ利用ランキングの一位にランクされているからである（CNNIC,2018）。

2019 年 9 月 17 日から 10 月 6 日の期間に、オンライン調査のウェブサイト、「問巻星（Wen Juan Xing）」を用いてオンラインアンケート調査を実施した。配布方法は図 3-1 に示したようにアンケートの説明（中国語版）をウィチャットのユーザーグループで広め、インセンティブとして抽選の形で「スマホ・ラッキーくじ」を提出済みの回答者に与えることにした。図 3-1 中の QR コードをスマホで読み取れば、簡単にアクセスでき、図 3-2 のようなアンケートの画面が表示される。調査対象となるスキーを経験した北京住民を選出するために、最初の 2 つの質問でスクリーニングをすることにした。「いいえ」を選択した人は調査が終了し、2 つとも「はい」を選ぶと次の質問に進めるという仕組みが設けられている。Couper（2014）によれば、オンライン調査を実施する際は、「回答時間は短いほうがよい。回答時間を 13 分以内に抑えるほうが高い有効回答を回収できる」と指摘されている。We（2010）は「オンラインアンケートのページめぐりと組分けはスマホユーザー向けの際に、ユーザーの閲覧習慣と操作習慣にとって考慮すべきだ。アンケートの完了時間が縮み、回答放棄率も下げる」と指摘されている。したかつて、回答にかかる時間を、5 分以内を目安になるように想定して調査票を作成した。

オンラインアンケートでは、ツール機能を活用した上で、空欄での回答ができないようにしたり、回答の誤入力がないようにすべて選択式にするなどとして、論理的な回答が得られるようにするだけでなく、設問が拒否できないという形に設定した。その結果、「回答なし」という項目を省けるようになった。これゆえ、時間と費用の節約が達成でき、操作も便利になったと考えられる。

図 3-1 調査協力請求説明ポスター

アンケートご協力のお願い

本アンケートは早稲田大学スポーツ科学ビジネスマネジメント研究科が実施する学術的な調査です。北京においてスキー参加者の参加動機に関する基礎的データを集め、今後の中国スキー産業のさらなる発展と普及に約たてたいと考えています。調査結果は統計処理いたしますので、皆様にご迷惑をおかけすることは絶対にございません。どうか調査主旨をご理解いただき、ご協力くださいますようお願いいたします。

早稲田大学スポーツ科学研究科スポーツビジネスマネジメント研究室




図 3-2 調査アンケートのスマホ画面

北京滑雪者动机调查

您好:

我是早稻田大学体育科学研究科硕士2年级的学生,这是一份学术性问卷,目的是了解冬奥会举办地-北京地区住民参加滑雪运动的基本情况和参加动机。本问卷只用于本人论文,衷心感谢您在百忙之中抽出时间协助调查,您的支持会对我的论文提供很大的帮助!谢谢您的支持!

***您有没有参加滑雪运动的经历**

☐ 有

☐ 没有

***您目前的居住地**

☐ 北京

☐ 北京以外地区

第2項：調査項目

（1）調査対象の選別項目

最初に調査対象を選別するため、スキーの経験者を絞り込むための2つの問題を設けた、2つとも「はい」を選んだ回答者のみ、次の質問に進んでもらうようにした。

（2）スキーレベルとスキー場宿泊状況

NAC (Niseco adventure center) に掲載されているスキーレベル表を参考にした上で、スキーの技術レベルを6段階に分けることにした。この6段階とは、「（1）レベル1 初心者：自分自身で止まれない、スキーを履いてバランスがとれない（2）レベル2 初級：2－3回経験、プルーク（ハの字）スタンスで安全に停止ができる（3）レベル3 初級：4－7回経験、初級者斜面でプルークボーゲン（ハの字ターン）ができる（4）レベル4 中級：緩斜面、初級者用斜面でパラレルターンができる。ハの字の狭いスタンスで中級者用斜面を滑ることができる（5）レベル5 上級：様々な中急斜面をパラレルターンで滑ることができる（6）レベル6 エキスパート：スキーエリア内の様々なオンピステ斜面を滑ることができる」となっている。

中国ではスポーツとしてのスキーは歴史が浅く、中国全土において7割のスキー参加者は初心者というのが現状である。そのため、オリンピック開催地の北京において、スキーの経験者たちがどのようなスキーのレベルにあるかを知ることは現状を把握するために重要であると考えて、項目を設定することにした。

（3）スキー経験者のデモグラフィック

スキー参加者のデモグラフィックを把握するため、性別、年齢、学歴と月収という項目を設定した。

（４）スキー経験者の参加動機

スキーを参加した経験者たちの参加動機に関しては、Ma（2017）が用いた中国語のスキー参加動機 5 因子（内発的動機づけ：チャレンジ因子；自然を楽しむ、外発的動機づけ：社会的な認知；リラックス；個性を表す） 19 項目の尺度を応用した。回答者には「スキーを参加する動機について、それぞれ当てはまる番号を選んでください」という質問文で回答を求め、測定尺度には、「1：全く当てはまらない」から「7：非常に当てはまる」の 7 段階リッカート尺度を用いた。

第4章 結果と考察

第1節 スキー参加者に関する特性

第1項 人口統計的特性

本研究の調査対象者の人口統計的な特性を表 4-1 に示す。アンケートの回収数は、合計 483 部、そのうち有効回答数は 451 部であった。回答は男性が 54%、女性が 46%であった。19～25 歳が 45%で最も多く、次に 26～30 歳が 25.8%、31～40 歳が 14.7%であった。月収については、5,001～8,000 円（約 80,000 円～128,000 円；1 元＝約 16 円）が 28.8%と最も多く、次いで 8001～10000 円（約 128,000～160,000 円）が 20%であった。学歴に関しては大学卒が 60.3%と最も多く、次に専門学校卒 13.5%という結果になった。

第2項 スキーレベル

つぎに、本研究対象者のスキーレベルを表 4-1 に示す。レベル 2（2－3 回経験、プルーク（ハの字）スタンスで安全に停止ができる）のスキー参加者が 37.7%と最も多く、次にレベル 1（自分自身で止まらない、スキーを履いてバランスがとれない）が 29.3%であった。レベル 1 とレベル 2 の合計は 66%であり、約 7 割の参加者が初級者であることがわかった。

表 4-1 スキー参加者の人口統計特徴とスキーレベル

性別	n	%	学歴	n	%	スキーレベル	n	%
男	242	54	小学校以下	4	0.9	レベル 1	132	29.3
女	209	46	中学校	27	6	レベル 2	170	37.7
合計	451	100	高校	42	9.3	レベル 3	62	13.7
			専門学校	61	13.5	レベル 4	47	10.4
			大学	272	60.3	レベル 5	24	5.3
			大学院	45	10	レベル 6	16	3.6
			合計	451	100	合計	451	100
年齢	n	%	月収	n	%			
～18	12	2.7	～2000	26	5.8			
19～25	203	45	2001～3000	26	5.8			
26～30	116	25.8	3001～5000	61	13.5			
31～40	66	14.7	5001～8000	130	28.8			
41～50	36	7.9	8001～10000	90	20			
51～60	17	3.7	10001～20000	55	12.2			
60～	1	0.2	20001～	15	3.3			
合計	451	100	収入なし	48	10.6			
			合計	451	100			

第3項 スキー経験と特性

本研究対象者のスキー経験と特性を示したものが表 4-2 になる。過去一年以内にスキーを行ったことがある人は 358 人、ない人が 93 人であり、スキー場近辺に泊まる人は 194 人、泊まらない人は 257 人。宿泊しない人（257 人）と無効回答（6 人）を除き、宿泊人数は 188 人となった。宿泊期間を見てみると、2 日間かけて泊まる人が一番多く、88 人（46.8%）であった、次に 3 日泊まる人の割合は 51 人（27.1%）と 1 日泊まる人の 32（17.0%）人という結果になった。したがって、約 8 割以上の宿泊者が 3 日以内スキー場に泊まることがわかった。続いて、消費金額について見てみることにした。宿泊地で 251～500 円

(1 元=約 16 円) (4016~8000 円) を消費した人が 208 人 (46.50%) と最も多く、次に 0~250 元 (0~4000 円) を消費した 97 人 (21.70%) , 3 番目は 501~1000 元 (8016~16000 円) の 88 人 (19.7%) で、平均消費金額は 789.7 元 (12635.2 円) という結果になった。

表 4-2 スキー経験と特性

以前のスキー経験		スキー場宿泊	
はい	358	はい	194
いいえ	93	いいえ	257
合計	451		451

宿泊日数	n	%
1	32	17.0%
2	88	46.8%
3	51	27.1%
4	2	1.1%
5	8	4.3%
>5	7	3.7%
合計	188	100%

消費金額	総額	n	%	平均値
0~250	14631	97	21.70%	150.8
251~500	73811	208	46.50%	354.9
501~1000	67300	88	19.70%	764.8
1001~5000	114252	47	10.50%	2430.9
>5000	83000	7	1.60%	10375
合計	352994	447	100%	789.7

第2節 スキー参加者の参加動機尺度の分析結果

本研究で使用した尺度の信頼性を検証するため、確認的因子分析を行った。モデルの構成概念について妥当性を検証する必要があるため、参加動機尺度の妥当性を検証するため、本調査の分析には、SPSS Statistics Ver.25.0 並びに Amos Ver.25.0 を使用して確認的因子分析を実施した。モデル適合度指標である GFI (Goodness of fit index)、AGFI (Adjusted goodness of fit index)、CFI (Comparative fit index)、RMSEA (Root mean square error of approximation) を用いた。モデルの部分的評価については、相関係数の有意性を示す CR : 合成信頼性と AVE : (Average variance extracted) 平均分散抽出を用いた。

確認的因子分析をしたところ、質問項目に対するすべての因子負荷量が.70 を上回っているため、本研究で用いた参加動機尺度は信頼できると判断した。表 4-3 に平均値、標準偏差、相関行列を示した、また、各尺度の信頼性として、 α 係数を求め、内的整合性を確認したところ、チャレンジは、 $\alpha=.88$ 、社会的な認知は $\alpha=.91$ 、リラックスは $\alpha=.85$ 、自然を楽しむは $\alpha=.88$ 、個性を表すは $\alpha=.86$ 。全体については.70 を上回った水準であった。因子モデルの適合度指標はモデル適合度：確率=.00；CMIN/DF=4.62；GFI=.86；CFI=.92；RMSEA=.09 となった。CMIN/DF の数値は3から5までが妥当なので、高い適合性が見られた。CFI は高い数値を示したが、GFI、RMSEA については一部目標とされる水準を下回る結果となった。。若干、課題が残る結果となったが、全体的な傾向から見てモデル適合度は高い数値を示したことと、有意関係が見られたモデルはモデル適合度が良かったことを踏まえ、変数間の因果関係を解釈するモデルとして利用可能であると判断した。また平均値においては、「社会性」因子の項目が4点から5点台の値と

なったが、ほか「チャレンジ」、「リラックス」、「自然」と「個性」4つの因子項目は5点以上の値であった。

表 4-3 確認的因子分析結果と平均値・標準偏差

質問項目	α	M	SD	因子 負荷量	AVE	CR
チャレンジ	0.88	5.21			0.60	0.89
1.スキーを実施することは、わくわくするから		5.18	1.56	0.75		
2.スキーを実施することは、自分をチャレンジできるから		5.19	1.53	0.77		
3.スキーを実施することは、スキーがもたらす興奮を楽しむから		5.39	1.38	0.83		
4.スキーを実施することは、スリルがあってわくわくするから		5.25	1.47	0.81		
5.スキーを実施することは、スキー技術が上達できるから		5.06	1.57	0.72		
社会的な認知	0.91	4.42			0.72	0.91
6.スキーを実施することは、他人に印象を与えることができるから		4.52	1.78	0.87		
7.スキーを実施することは、他人の注目を集めることができるから		4.15	1.85	0.83		
8.スキーを実施することは、他人が自分のことを知るから		4.36	1.84	0.92		
9.スキーを実施することは、他のスキー愛好者と友達になれるから		4.65	1.74	0.77		
リラックス	0.85	5.07			0.58	0.85
10.スキーを実施することは、日常のストレスを解消できるから		5.11	1.53	0.76		
11.スキーを実施することは、リラックスができるから		5.12	1.53	0.76		
12.スキーを実施することは、健康が保てるから		5.08	1.52	0.79		
13.スキーを実施することは、日常生活を忘れることができるから		4.97	1.59	0.74		
自然を楽しむ	0.88	5.17			0.71	0.88
14.スキーを実施することは、自然風景を楽しむため		5.15	1.60	0.86		
15.スキーを実施することは、屋外の雪景色を楽しむため		5.10	1.60	0.78		
16.スキーを実施することを通して、自然と触れ合うため		5.26	1.52	0.89		
個性を表す	0.86	5.22			0.67	0.86
17.スキーは他のスポーツと違うから		5.16	1.51	0.83		
18.スキーは個性があるから		5.11	1.57	0.79		
19.スキーはカッコいいから		5.38	1.45	0.83		

モデル適合度：確率=.00；CMIN/DF=4.62；GFI=.86；CFI=.92；RMSEA=.09；CR：合成信頼性；
AVE：（AverageVarianceExtracted）＝平均分散抽出

第2節 一元配置分散分析によるスキーレベルの比較

構成概念について一定の妥当性を確認できたことから、スキーレベルによる比較をすることにした。まず、一元配置分散分析を行う前に選別項目を設定した。第1問「スキーに参加したことがありますか？」との質問に、「はい」と答えた場合には次の問題へ進むことができ、「いいえ」を答えた場合はここで調査終了となった。第2問「いま北京に住んでいますか？」は第1問と同じく、「はい」と答えた場合は次の問題へ進み、「いいえ」と答えた場合はここで調査終了となった。第3問からは全員同じ質問を答えていくこととなり、最後の参加動機まですべて回答済みの人が本研究の研究対象となった。

スキーレベル別における参加動機因子の差を明らかにするために、一元配置分散分析を行った（表4-4）。レベル5（上級：様々な中急斜面をパラレルターンで滑ることができる）とレベル6（エキスパート：スキーエリア内の様々なオンピステ斜面を滑ることができる）は、サンプル数が少ないため、この2つの組を合わせて新たなグループであるレベル5とし、6段階あったレベルを5つに分けることにした。スキーレベル別では、内発的動機づけ因子「チャレンジ」（F値=4.71, $p<.01$ ）、外発的動機づけ因子「個性を表す」（F値=4.54, $p<.01$ ）の2因子に有意な差がみとめられた。

平均値を見ると、ほかのレベルの参加者よりも、レベル5のスキー参加動機が明らかに高い。レベル高くなれば高くなるほど、チャレンジ感、ソーシャル性、心身のリラックス、自然から得た楽しさ、そして個性の表現をスキーから得られると考えていることがわかる。

第3節 スキーレベルと参加動機各因子の比較

第1項 多重比較によるスキーレベル別の結果と考察

調査対象地域である北京において、スキー参加者のスキーレベルと参加動機との関係を明らかにするために、調査対象とした451名の回答ごとにレベル1からレベル5（レベル5と6については表4-4に示したように回答者が少なかったため、5,6をレベル5として扱った）までの5群に分類し、一元配置の分散分析を行った。その結果を表4-4に示す。

表 4-4 スキーレベルによる動機の比較

因子	①レベル 1 (n=132)		②レベル 2 (n=170)		③レベル 3 (n=62)		④レベル 4 (n=47)		⑤レベル 5 (n=40)		F 値	有意 確率
	M		M		M		M		M			
	M	SD	SD	SD	SD	SD	M	SD	SD	SD		
チャレンジ	3.98	(0.99)	4.24	(0.98)	4.15	(0.98)	3.9	(0.89)	4.69	(1.06)	4.712***	0.001
社会的な認知	4.29	(1.56)	4.61	(1.55)	4.46	(1.64)	4.0	(1.58)	4.41	(1.79)	1.569	0.182
リラックス	4.91	(1.34)	5.19	(1.18)	5.08	(1.33)	4.8	(1.29)	5.36	(1.27)	1.961	0.1
自然を楽しむ	5.10	(1.38)	5.31	(1.21)	5.15	(1.46)	4.7	(1.71)	5.4	(1.76)	2.011	0.092
個性を表す	5.09	(1.37)	5.37	(1.22)	5.21	(1.29)	4.6	(1.53)	5.7	(1.23)	4.536***	0.001

*** : $p < .001$

参加動機に影響を与えると考えられる変数をスキーレベルとして、一元配置の分散分析を行った。参加動機因子を従属変数、スキーレベルの水準を独立変数として分析した結果、チャレンジと個性との間に 0.1%水準で有意差が認められた。

Hungenberg (2013) らの研究によると、スキーをチャレンジして得られる刺激感は、スキーの参加頻度とスキーレベルに著しく影響を与える。有意差がみられたチャレンジ因子図 4-1 と個性因子図 4-2 の平均値と標準偏差をそれぞれ図に示した。その後、スキーレベル間の差をみるため、tukey の HSD 法による多重比較を行った。

まず、チャレンジ因子では、「レベル 5」と「レベル 1」($p<.001$)の間、「レベル 5」と「レベル 3」($p<.05$)の間、「レベル 5」と「レベル 4」($p<.01$)の間、の 3 要因に有意な差がみられた(表 4-5 を参照)。平均値を見るとレベル 5 が 4.69 と高い値を示していた。この結果から、レベル 5 のスキー参加者はスキーからもたらすスリル感を楽しみにスキー場に訪れると考えられる。そして、このレベルのスキー参加者は他のレベルよりスキーから得られる興奮感が一番高くなり、他のタイプとの間において参加動機が明らかに高いという結果に繋がったのではないかと考えられる。

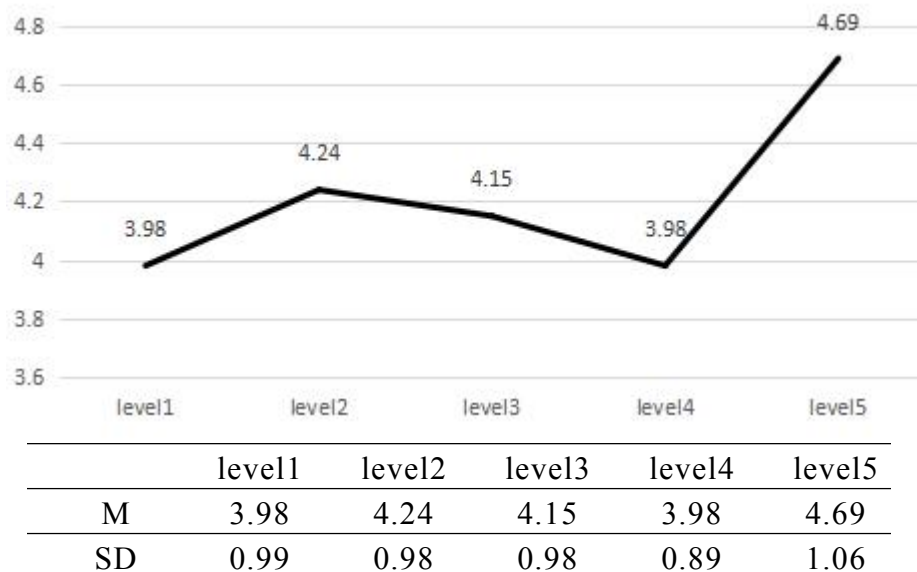


図 4-1 チャレンジ因子レベル別比較

表 4-5 tukeyHSD 法分散分析表 チャレンジ因子 多重比較

従属変数	(I) スキー レベル	(J) スキー レベル	平均値の 差 (I-J)	標準 誤差
チャレンジ	level5	level1	0.71***	0.18
		level3	0.54*	0.20
		level4	0.71**	0.21

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

次に、個性因子では、「レベル 2」と「レベル 4」の間 ($p<.01$)、「レベル 5」と「レベル 4」の間 ($p<.01$)、の 2 要因に有意差がみられた表 4-6。平均値をみるとレベル 5 が 5.7 と高い値となった。この結果から、レベル 4 のスキー参加者はレベル 2 とレベル 5 よりスキーを通してあらわした個性を重視することが推察される。そして、スキーというスポーツを参加してから身につけるものの独特性が参加者たちを引き寄せる要因と考えられる。

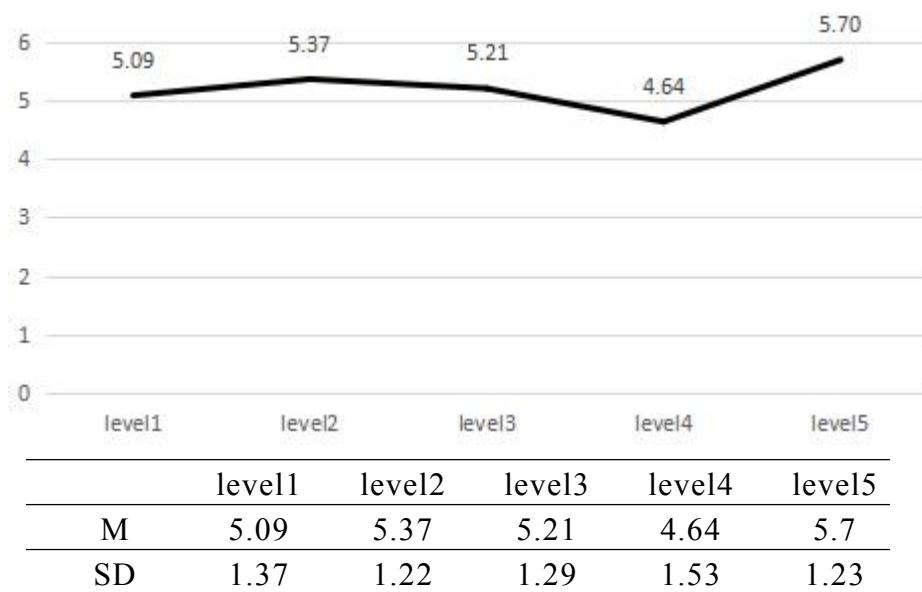


図 4-2 個性因子レベル別比較

表 4-6 tukeyHSD 法分散分析表 個性因子 多重比較				
従属変数	(I) スキーレベル	(J) スキーレベル	平均値の差 (I-J)	標準誤差
個性	level2	level4	0.73**	0.22
	level5		1.06**	0.28

*p<. 05, **p<. 01, ***p<. 001

結論

第1節 まとめ

本研究では、北京のスキー参加者の 1. 個人的な特徴を明らかにすること、2. スキーレベルまたは経験と特性を明らかにすること、3. スキーレベル別による参加動機の違いを明らかにする、という三つの研究目的を設定し、中国北京におけるスキー参加者を研究対象にオンラインアンケート調査を実施した。

それぞれの分析結果：

1. 北京におけるスキー経験者は、男性と女性がほぼ同じ割合で、30 代以下の若年層が最も多いということがわかった。北京市の平均月収は約 6906 元（約 110,496 円）であるが、月収 5000~10000 元（約 80,000 円～約 160,000 円）の中高収入層は最も多い。また、6 割のスキー経験者が大学卒であり、高学歴者が多いということも明らかになった。
2. 参加者のスキーレベルまたは経験と特性については、北京におけるスキー参加者の約 7 割がレベル 1 とレベル 2 の初心者であることが明らかになった。また約 8 割の参加者が、過去一年間の間にスキーしたと回答している。次に宿泊状況について見てみると、約 6 割の参加者がスキー場近辺に泊まっていないことがわかった。また、残りの 4 割の宿泊するスキー参加者の中で、宿泊日数が 3 回以内の人が 8 割以上を占めていた。スキーにおける一日の消費金額では 6 割の参加者が 500 元（約 8,000 円）以下ということが明らかになった。
3. スキーレベル別による参加動機の違いでは、参加動機とレベル別の比較に有意な差がみられ、「チャレンジ」と「個性」この 2 つの因子が北京スキー参加者にとって重要

な参加動機であることがわかった。多重比較の結果では、「チャレンジ」因子は3要因、「個性」因子は2要因に有意な差がみられた。

前節で得られた結果から、北京におけるスキー参加者、またはスキー産業発展に関するインプリケーションを提示したい。

第一に、北京のスキー参加者から、過去のスキー経験とスキーレベル、または宿泊施設などの基本情報を得ることができた。北京は中国で最も平均所得が高い地域であり、政府がウィンタースポーツを積極的に推進するのみならず、中国における他の地域が比べられない高品質なスキーリゾートを有している。北京のスキー参加者が全国平均と同じ、70%が初心者であることを本研究からも明らかにすることができた。スキー参加者の特性の一つとして、高齢参加者が少なく、30代未満の若者が中心的な参加者であることがわかった。。参加者は、約70%が大学以上の学位を持ち、教育と収入レベルも平均より高い。

第二に、今回の調査対象者の多くは、スキーの経験を持ち、スキー場の近くに滞在せず、3日以内の短期滞在を選択した人がほとんどである。総回答人数半分に占めるスキー参加者が5000~10000元の中高収入者となり、他のスポーツと比べてスキーはお金を費やすスポーツと推察される。

第三に、19個の質問と5つの因子測定を用いた分析により、スキー技術の高い参加者は、スキースキルの向上をもっと精力を費やし、スキーの緊張感と興奮を感じやすい。このことによって、他のスポーツとは異なる楽しさを体験できていることがわかった。また、スキーの独特な魅力を感じている様子もわかった。上級者より、初級と中級のスキー経験者たちが重視しているのは個性であることもわかった。すなわち、このレベル

の高い2つの組がスキーというスポーツの独特性を明らかに感じしており、スキーの魅力に引き寄せられていると考えられる。

第2節 提言

1. スポーツにおける文化の要素は、スポーツへの参加を決める最も重要な要素の1つであるが、西洋のスキー文化は長い歴史を持つ一方で、中国ではまだまだスキー文化が形成されておらず、中国のスキー参加者が少ない原因の1つである。ほとんどのスキー経験者は初心者であり、民衆もスキーに対する認識が低く、スキーの魅力を理解することが難しい。北京のスキー参加者は、今後もスキーに参加し続けることを望んでおり、そのため、政府はスキー場と協力してスキー文化を広めていくべきである。そして年齢や教育レベルの壁を破り、スキー参加者の数を増やすとともに、より多くの人々がスキーの習慣を維持ことに配慮し、スキー文化を国民に浸透させ、スキー文化を育てていく必要がある。

2. 本研究の結果によると、上級スキー経験者は、初心者よりスキーへ高い熱意を持ち、自分のスキーレベルの向上に精力を費やし、スキーにおける遊びやスリルのような要素であるイリックスを楽しんでいる。この状況に対して、スキーへの伝統なイメージを打ち破り、スキー観光の形に変えるにはイリックスを求める上級スキー経験者だけでなく、観光客も含め、初心者の中上級に底上げしていきながら、市場を広げる必要がある。初心者は上達者と同じで、個性因子をもっと重視し、スキーサービスの品質を向上させ、スキーの体験を増やせば、スキーの持つユニークな特性がより多くの人々を引き

つけていくと考えられる。

第3節 本研究の限界と課題

本研究は、中国スキー研究において新たな研究視点を提示したが、限界も存在している。限界としては、援用した Ma (2017) スキー参加者の参加動機がスキー場に訪れた人を対象とした研究であるため、オンライン調査における汎用性は、十分に検証されているとは限らない。そのため、尺度の測定項目について再検討を行う必要がある。

次に、中国においてスキー経験者の三分の一を占める北京のスキー経験者を研究対象としているので、代表的な標本抽出をしており、十分な研究の意義があると考えられる。しかしながら、研究結果の一般化に向けては本研究結果の価値と意義が中国におけるスキー産業の発展にもたらす貢献について注意深く検討を行う必要がある。

続いて、本研究はオンラインアンケートを用いた調査であり、デメリットも存在している。研究者は回答者の状態を現場で観察することはできず、アンケート配布と回答状況を有効的に管理できない、さらにサンプルの抽出についても同様に完全なる保障ができるわけではない。これらの問題を解決するため、無効回答を外すように回収したアンケートのダブルチェックを行った。より多くの調査対象にアンケートを回答してもらうようにするため、配布用オンラインプラットフォームと配布手段をもっと考慮する必要がある。オンラインアンケート調査の実施法は、これからの研究において再検討されるべきところだと考えている。

最後に、本研究は北京のスキー参加者についての基本状況と参加動機を調べた上で、スキルレベル別と参加動機を比較して分析した。中国におけるスキー発展状況は他国と異なっており、中国国内でも地域によって相違が存在している。地域特徴を考えるに踏まえて中国と他国または、北京と北京以外の地域を比べると、参加動機に影響を与える要因が多様に存在すると考えられる。研究地域の違いがもたらすスキーへの参加動機の違いも、本研究の成果を一般化するための今後の研究の方向である。

引用・参考文献一覧

1. Alexandris , C. Kouthouris , D. Funk & C. Giovani (2009) Segmenting Winter Sport Tourists by Motivation: The Case of Recreational Skiers, Journal of Hospitality Marketing & Management, 18:5, 480-499.
2. Iso-Ahola, S. E. (1999). Motivational foundations of leisure. In E. L. Jackson & T. L. Burton (Eds.), Understanding leisure recreation, mapping the past, charting the future (pp. 35-51). State College, PA: Venture Publishing.
3. Ma Peiyan, Zhang Ruilin, Li Ling (2018) Motivation of Enduring Skiing Consumption from the Perspective of Self-determination Theory. Journal of TUS Vol. 33, No. 6, pp. 485~491.
4. Kan Junchang & Jiang Lijia (2012). The development of chinese skiing industry, Journal of Wuhan Institute of Physical Education, Vol. 46 No. 1.
- Luo Chengquan, Lu Feng (2005). The development of Beijing skiing industry, Sports Science, Vol. 2, No. 25.
5. Schiffman L, & Kanuk, L. (2004). Consumer-behaviour-Upper Saddle, River, NJ: Prentice-Hall.
6. Richard M. Ryan and Edward L. Deci (2000) Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being, American Psychologist, Vol. 55, No1, 68-78.
7. Vallerand, R. J., Pelletier, L. G., Blais, M. R., Briere, N. M., Senecal, C. & Vallieres, E. F. (1992) The academic motivation scale: A measure of intrinsic, extrinsic, and amotivation in education. Educational and Psychological Measurement, 52, 1003-1017.

8. 岡田涼 (2010) 自己決定理論における動機づけ概念間の関連性—メタ分析による相関係数の統合. 日本パーソナリティ心理研究. Vol. 18, No. 2, 152-160.
9. Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1980) The empirical exploration of intrinsic motivational processes. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 13. New York: Academic Press.
10. Hunt, J. McV. (1965) Intrinsic motivation and its role in psychological development. *Nebraska Symposium on Motivation*, 13, 189-282.
11. Nicholls, J. G. (1983) Conceptions of ability and achievement motivation: A theory and its implications for education. *Learning and motivation in the classrooms*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
12. Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination*. New York: Plenum Press.
13. Weiner, B., Frieze, I. H., Kukla, A., Reed, L., Rest, S., & Rosenbaum, R. M. (1971) Perceiving the causes of success and failure. In Jones, E. E., Kanouse, D. Kelley, H. H., Nisbett, R. E., Valins, S., & Weiner, B. Eds., *Attribution: Perceiving the causes of behavior*. New Jersey: General Learning Press.
14. Mavletova, A, Couper P. (2014) Mobile Web Survey Design: Scrolling versus Paging, SMS versus E-mail Invitations. *Journal of Survey Statistics & Methodology*.
15. Weimiao Fan, Zheng Yan (2010). Factors affecting response rates of the web survey: systematic review. *Computers in Human Behavior*, 2010, 26: 132-139

16. 呉羽正昭 (2017) スキーリゾート発展プロセス.
17. Hein, V., Mür, M., & Koka, A. (2004). Intention to be physically active after school graduation and its relationships to three types of intrinsic motivation. *European Physical Education Review*, Vol. 10, 5–19.
18. Jonathan Casper (2007) Sport Commitment, Participation Frequency and Purchase Intention Segmentation based on Age, Gender, Income and Skill Level with US Tennis Participants, *European Sport Management Quarterly*, 7:3, 269–282.
19. Steve Chen, Shonna Snyder & Monica Magner (2010) The Effects of Sport Participation on Student-Athletes and Non-Athlete Students Social Life and Identity. *Journal of Issues in Intercollegiate Athletics*, Vol. 3, 176–193.
20. Vello Hein, Maret Mür and Andre Koka (2004) Intention to be physically active after school graduation and its relationship to three types of intrinsic motivation. *EUROPEAN PHYSICAL EDUCATION REVIEW*. Vol. 10, No. 1. 5–19.
21. Alexandris K, Kouthouris C, Girgolas G (2007). Investigating the Relationships among Motivation, Negotiation, and Alpine Skiing Participation. *Journal of Leisure Research*, Vol. 39, No. 4, 648–667.
22. Finn B (2011). Exploring Ski Tourist Motivations for Active Sport Travel. Windsor : University of Windsor, 15–62.
23. Hungenberg E, Gould J, Daly S (2013). An Examination of Social Psychological Factors Predicting Skiers Skill, Participation Frequency, and Spending Behaviors. *Journal of Sport & Tourism*, Vol. 18, No. 4, 313–336.

24. 中国スキー産業白書(2018)

25. NAC adventure. <http://www.nacadventures.jp/guiding-lessons/level>

付録：調査で用いた質問紙

Q1. スキーの参加状況と居住地についてお伺いします							
(1) *スキーを参加したことがありますか？ 1. はい 2. いいえ (いいいえを回答した人ここで終わります)							
(2) *いま北京に住んでいますか？ 1. はい 2. いいえ (いいいえを回答した人ここで終わります)							
Q2. あなたのスキーレベルについてお伺いします							
(1) レベル1 初心者：自分自身で止まらない、スキーを履いてバランスがとれない							
(2) レベル2 初級：2－3回経験、プルーク（八の字）スタンスで安全に停止ができる							
(3) レベル3 初級：4－7回経験、初級者斜面でプルークボーゲン（八の字ターン）ができる							
(4) レベル4 中級：緩斜面、初級者用斜面でパラレルターンができる。八の字の狭いスタンスで中級者用斜面を滑ることができる							
(5) レベル5 上級：様々な中急斜面をパラレルターンで滑ることができる							
(6) レベル6 エキスパート：スキーエリア内の様々なオンピステ斜面を滑ることができる							
Q3. あなたのスキー経験と宿泊状況についてお伺いします							
(1) 過去の一年間にスキーを行ったことがありますか？ 1. はい 2. いいえ							
(2) スキー場の近くに泊まりますか？ 1. はい (はいを回答した人は次の質問を答えてください)							
2. いいえ (いいいえと回答した人は3番を飛ばして4番の質問から続けてください)							
(3) *何泊ですか？ _____泊							
(4) 1日の平均消費金額はいくらですか？(宿泊、食事、レンタル費用など全部含め) _____元							
Q4. あなた自身のことについて伺いします							
(1) 性別 1. 男性 2. 女性							
(2) 年齢 1. 18歳以下 2. 18～25歳 3. 26～30歳							
4. 31～40歳 5. 41～50歳 6. 51～60歳 7. 60歳以上							
(3) 学歴 1. 小学以下 2. 中学校 3. 高校 4. 専門学校 5. 大学 6. 大学院							
(4) 月収 1. 2000元以下 2. 2001～3000元 3. 3001～5000元							
4. 5001～8000元 5. 8001～10000元 6. 10001～20000元							
7. 20000元以上 8. 収入なし							
Q5. スキーを参加する動機について、それぞれ当てはまる番号を選んでください。							
	全く 当てはまらない		どちらとも いえない			大いに 当てはまる	
1. スキーを実施することは、わくわくするから	1	2	3	4	5	6	7
2. スキーを実施することは、自分をチャレンジできるから	1	2	3	4	5	6	7
3. スキーを実施することは、スキーがもたらす興奮を楽しめるから	1	2	3	4	5	6	7
4. スキーを実施することは、スリルがあってわくわくするから	1	2	3	4	5	6	7
5. スキーを実施することは、スキー技術が上達できるから	1	2	3	4	5	6	7
6. スキーを実施することは、他人に印象を与えることができるから	1	2	3	4	5	6	7
7. スキーを実施することは、他人の注目を集めることができるから	1	2	3	4	5	6	7
8. スキーを実施することは、他人が自分のことを知るから	1	2	3	4	5	6	7
9. スキーを実施することは、他のスキー愛好者と友達になれるから	1	2	3	4	5	6	7
10. スキーを実施することは、日常のストレスを解消できるから	1	2	3	4	5	6	7
11. スキーを実施することは、リラックスができる	1	2	3	4	5	6	7

から							
1 2. スキーを実施することは、健康が保てるから	1	2	3	4	5	6	7
1 3. スキーを実施することは、日常生活を忘れることができるから	1	2	3	4	5	6	7
1 4. スキーを実施することは、自然風景を楽しむため	1	2	3	4	5	6	7
1 5. スキーを実施することは、屋外の雪景色を楽しむため	1	2	3	4	5	6	7
1 6. スキーを実施することを通して、自然と触れ合うため	1	2	3	4	5	6	7
1 7. スキーは他のスポーツと違うから	1	2	3	4	5	6	7
1 8. スキーは個性があるから	1	2	3	4	5	6	7
1 9. スキーはかっこいいから	1	2	3	4	5	6	7